



2025（令和7）年2月28日発行
（編集）愛光本部
（TEL）043-484-6391
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

【小学生書き初め展】

1月11日から26日まで、新年恒例となっている愛光後援会 愛の灯台基金主催の『小学校書き初め展』が、佐倉市南部保健センター1階ロビーで開催されました。近隣小学校5校（根郷小、山王小、寺崎小、弥富小、和田小）から出展いただいた力強い作品から、作品を観た人たちは多くの元気をもらいました。

□事業経過など（2025.1.1～）

6	月	本部スタッフ会議
7	火	業務執行会議
8	水	感染症研修/人材育成トレーニング
9	木	広報委員会/メンター委員会
14	火	防災委員会/職場改善委員会
15	水	地域食堂ともいき
16	木	リスクマネジメント委員会/採用後1年面接
17	金	ボランティア委員会
18	土	理事会
19	日	地域連携推進会議
20	月	佐倉圏域事業部実績会議
21	火	人事ワーキング会議/衛生委員会・感染症対策委員会
22	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務プロジェクト
23	木	高齢者福祉事業部実績会議/後援会運営委員会/施設・業務診断(5S)
24	金	施設・業務診断(5S)
25	土	山王みらいプロジェクト
27	月	テクニカルスキル研修
28	火	コンプライアンス委員会/試用期間終了面接

■月報から

□第三者委員懇談会 (ルミエール)

19日の午後、家族会の日に第三者委員である大井孝先生を交えて懇談会が行われた。施設職員が同席しない場であるので忌憚のない意見が出たと大井先生は話されていたが、ご家族によって、利用者に対する思いの強さを感じられた。2月からはじまる担当者会議を控え担当職員が利用者家族、後見人に要望をうかがっており、多くの気持ちを引き出せるようにしていきたい。

(ルミエール課長 原 宏之)

□満足度調査 (めいわ)

利用者の皆さんが現在の施設生活をどう感じているのか、年末から満足度調査を実施していた。質問項目は10個。食事や入浴の場面、日中活動、イベントなど、生活の中で楽しいこと、嬉しいこと、悩みや困っていること、してほしいこと…について聞き取りをした。調査はすでに完了し、1月の職員会議で係の職員から調査結果の報告をもらった。

毎年調査をして、いつも課題となるのが、利用者の皆さんから本音の意見を引き出すことである。利用者の皆さんから挙げた意見は好意的なものも否定的なものも、施設を良くしていくためのヒントになるため、できるだけたくさん引き出したい。しかし、職員側の聞き方次第では、答えを引き出しきれないこともあるし、回答を誘導してしまうこともある。そこで今回、改めて質問の内容や方法を見直した。前は、ポジティブな回答が得られやすい内容を主とし、「はい・いいえ」で選択する回答方式で、そこからさらに思いを確認する手法で、結果多くの方の調査ができたが、具体的な改善につながりにくい側面もあった。そこで、今回の調査では調査対象者は「話ができる方」に絞られるが、どう考え、感じているか…その思いをより具体的に引き出すようにした。調査も1対1の場面を設定してもらった。調査した職員は、利用者との関係性や、相手の理解できる言葉に言い直すこと、利用者から言葉を引き出すことに、より難しさを感じ苦労したようだが、その分、多くの意見を引き出してもらうことができた。結果として実現が難しいこと(意見)もあるが、日頃感じていた思いに向き合うことで、利用者の皆さんが“話して良かった”と感じていただきたい。

(めいわ課長 中田 憲一郎)

□仕事始め！ - 木工班 - (根郷通所センター)

昨年末、四街道市にある福祉専門学校より一輪挿し(桜)30本を卒業記念として生徒に渡したいので制作をお願いできないかという依頼がありました。

突然のお話に驚いたものの、商品を気に入っていただき、そして大切な節目にお渡しするものに木工班の商品を選んでいただけたことはとても嬉しいことであり、快くお受けすることになりました。

納期まで残り1か月程になりました。完成まで、木工班一丸となって日々制作に励んでいます！

(根郷通所センター所長 菊池 暁生)

□地域連携推進会議を開催（リホープ）

地域連携推進会議の目的は、利用者と地域との関係づくり、地域の方への施設等や利用者に関する理解の促進である。

19日に、手探りの形であったが、4施設（リホープ・めいわ・ルミエール・山王の家）合同で、地域の関係者2名、各施設から代表の利用者、利用者家族、施設管理者が出席し、地域連携推進会議が開催された。

議題としては、施設見学、事業計画の説明、生活の状況（利用者から）などについて話をした。初めての開催ということもあり、活発な意見を交わすまでとはいかなかったものの、ご家族からは、サービスに関すること、マイナンバー（健康保険証）、後見人のことなどについて、話が出た。

（リホープ副施設長 麻生 知明）

□グループホームで過ごす時間（山王の家）

自宅では家族の支援があり、自分だけで行っていないことも、山王の家では「自分で出来ること（入浴や洗濯等）は自分で」行っているが自己流も目立つようになってきた。例えば、洗濯。洗うものや、洗剤の量、干し方、頻度、乾いていないうちにしまってしまう…など。入浴は髪や体の洗い方、せっけん類の量などそれぞれ確認が必要な部分が出てきている。ただ、利用者が入浴や洗濯を行う時間は世話人が一人に対応しつつ夕食を作っている時間でもあり、その場で支援する事がなかなか難しい状況ではある。まずは、宿直職員が出勤して対応出来る事から支援を実施し少しずつでも改善していければと思っている。

（山王の家管理者 岡本 綾子）

□佐倉市障害者総合支援協議会 精神部会当事者会をWSかぶらぎで開催 （ワークショップかぶらぎ）

障害者総合支援法第89条において県や市区町村には「障害者等への支援体制整備のため」の協議会設置が規定されており佐倉市では“障害者総合支援協議会”と呼称され、その運営形態は自治体に任されている。佐倉市では本会のほかに5つの専門部会を設置しており「生活」「啓発・権利」「就労」「療育・教育」「精神」という分野に分かれて協議を進める形をとっている。精神部会では更に当事者の声や経験を活かすべく当事者部会が令和5年に設置され、当事者活動やピアサポート活動をする人たちに交じってワークショップかぶらぎの利用者も参加している。

先般この当事者部会の世話役をかぶらぎのスタッフが担当することになり、1月27日にワークショップかぶらぎにて会議を行った。

この日は「精神科通院のみしている方への福祉情報の提供について」を中心にピアサポートや災害、緊急時の備え等について話し合わせ、自身の経験に基づくエピソードと共に様々なアイデア等が活発に出された。

精神部会に限ったことではないが、障害者への支援を検討するこの総合支援協議会の参加者はほとんどが支援者であり、当事者はどれだけ参画されているだろうか。

『Nothing about us without us』2006年に国連で採択された障害者権利条約の言葉はそういった状況に物申す一撃でもあったはずだ。自分のことを誰かに伝えられる当事者がいる

のであれば彼らの意見を出発点にした方が中身の濃い議論になるように思う。ワークショップかぶらぎの場をその発信源としていきたい。

(ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹)

□インフルエンザ感染 (ジョーの家)

年末にインフルエンザに感染された利用者さんは、発熱時に医師の判断もあり、受診は翌日でその日はホームでの対応となった。発熱により日常生活動作が困難になり、職員の支援が必要となった。翌日受診し服薬したことで解熱し、日常生活動作は回復することができた。解熱後3日間は隔離となり、お正月期間は自室で過ごすことになった。1月2日に隔離解除となり、普段の日常を取り戻し、ご家族のもとへ外泊され、遅れた正月を迎えることが出来た。ホームの感染対策としては、発熱後、感染マニュアルに則って、職員、世話人、他入居者への感染拡大を防ぐことができ、無事に終息した。今後もインフルエンザなどの感染症は、いつ発生するか予測できない。日頃から感染対策を意識し継続していくことが重要であると感じた。

(ジョーの家 高橋 健)

□新年会で猿回し! (よもぎの園)

今年の新年会は愛光秋まつりでも出演してもらった「猿芸工房」に来ていただき演目を披露していただいた(※猿まわしは元来、悪魔払いや厄除けといった神事との由来がある)。猿を生で見るのが初めての利用者も多く、目の前で芸を披露する猿に興味津々であった。猿使いの見事な話術に引き込まれていると、猿(名前はチーちゃん、千葉県出身で芸歴10年以上)もなかなかの演技派で足を引きずったり猿使いを足蹴にしたりと笑いが溢れる時間であった。皆の笑いが邪気を払ってくれていればと思う。

演目披露後、希望者は「猿のチーちゃん」と握手しながら写真撮影をおこなった。みんなドキドキしながらも猿の手の感触を感じることができたようで、「猿の肉球?が柔らかかった」と感想を聞かせてくれた。

(佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一)

□1周年を迎えることができました (かけはし)

令和7年1月1日で「かけはし」は1周年を迎えました。

二桁後半のケース数でスタートした昨年1月でしたが年度が変わる頃には三桁を超え新規ケースが落ち着くことはなく増加の一途。組織改編でアシストが佐倉圏域事業部となったことでケースの振り分けはアシスト・かけはし全体で実施することができるようになりましたが年度を通して増え続けるケース数にどう対処していくのかは計画的な対応が必要です。相談員が足りないので相談が受けられない。という事態に陥らないよう、事業部全体で取り組みを実施していきたいと考えています。

一つ一つのケースに丁寧に対応し日々を忙しく過ごした1年目。急に大きな変化はないでしょうがサービスを必要とされている方へ、しっかりと寄り添え続けられる2年目でありたいと思います。

(かけはし所長 戸室 輝大)

□医ケア児者の個別避難計画書（アシスト）

佐倉市障害者総合支援協議会 生活支援部会の作業部会である「医ケア児者の災害対策検討部会」にて、災害時に医ケア児者が命の維持に必要な電源を確保し、生活を継続するための議論を続けてきた。令和元年の台風15号では、佐倉市内で停電が発生した。地震等の大規模災害ではなかったが、停電がすぐに復旧しないとわかった時、介護者である家族はただならぬ事態だと感じ、対象者の電源を確保するために必死だった。この作業部会は、この時の経験から生まれた。議論を重ね、提言書を提出し、いよいよ次年度から個別避難計画書の作成に取り掛かる。令和4年度からはモデルケースの協力を得て、地区住民との避難訓練を重ねた。まずは医ケア児者からの取り組みとなるが、災害時に困るのは他の障害も同様だ。広域避難所で生活することは難しいと思われる重度知的障害児者等々、取り組みが広がることを願っている。

さて、個別避難計画書の委託先となる相談支援事業所は、個別避難計画書の作成だけでなく、地域と当事者や家族を繋いでいく作業も加わる。可能であれば避難訓練も実施する。業務は大変であろうが、やりがいを持って取り組める内容でもある。スキルも求められる。1ケースずつしっかりと向き合っていきたい。

（佐倉圏域事業部長 近藤 美貴）

□おせちにお屠蘇（はちす苑）

お正月の料理といえば「おせち!!」お刺身や煮物、栗きんとんなどご利用者それぞれ堪能されていました。嚥下が難しくソフト食を召し上がっておられるご利用者にもおせちを提供させていただきました。

お酒を好まれる方には、少しですが苑長より金粉の入ったお屠蘇をお注ぎして召し上がっていただきました。「お代わり」と笑顔でおっしゃる方もいらしたので、「飲みすぎ」など無粋なことは言わず、お正月ならではの対応をさせていただきました。

（はちす苑 苑長 安部 一義）

□地域での認知症声掛け訓練（南部地域包括支援センター）

19日（日）、表町地区にて、午前中に認知症サポーター養成講座、午後には認知症声掛け訓練を行った。南部包括としては2年ぶり2回目の開催となった。声掛け訓練とは、認知症の方が道に迷ったり、困ったりしている時に、地域で声掛けや見守り体制ができるように、佐倉市が積極的に市内で推進している事業である。開催に至った経緯は、昨年度の地域ケア圏域推進会議で、表町地区の皆さんから地域の現状や課題を伺った。その中で「認知症の方への対応」が挙げられたことがきっかけだった。

「地域の中で認知症の話聞くことが増え、地域で取り組まなければ」という自治会長の思いから、まずは自治会役員11名の方対象の開催となった。

参加者の中には、認知症の家族の介護経験がある方もおり全体的に関心が高かった。認知症当事者だけでなく、その家族の思いを理解することも大事なのではないかとの意見もあった。自治会長からは、「今後は町内会全体に対象を広げて開催し、地域として認知症の理解を深めていきたい」と、今後の展開についてもご意見をいただいた。

南部圏域において、この事業を広めていくには、小規模からでも気軽に取り組める内容であったほうが、手を挙げる地域が増えていくのではないかと思う。各地域に事業を周知し取り組んでいけるようアプローチをしていきたい。

（南部地域包括支援センター管理者 森 由美子）

□アンケート（ニーズ）調査結果報告（南部地域福祉センター）

11月の1ヵ月間、センターを利用している利用者にアンケート（ニーズ）調査を実施した。163名の方々に回答をいただき、200件以上の貴重なご意見、ご感想をいただいた。集計後、1月の職員会議で職員間で共有した。センターを利用している年齢層は76歳～80歳が最も多く、利用年数は1年、5年、10年以上の順に多かった。センターに求めるものは「楽しさ、親睦、交流」が最も多く、センターの運営目標と合致しているところを確認できた。また、センターで新しくやってもらいたい事業としては、運動や健康関係で、健康重視の傾向がうかがえた。利用者への職員対応については、良い80%、普通17%、未記入3%、施設整備・清掃関係では、良い70%、普通26%、未記入4%であった。

（南部地域福祉センター 青山 秀人）

□ニューイヤーコンサート（佐倉市南部児童センター）

今回で4回目を迎える地域共生プロジェクト「ニューイヤーファミリーコンサート」。今年も音葉ウインド・オーケストラの皆さんの協力のもと、開催することができた。昨年、聴きにきた保護者からは「前回すごくよかったですので、今年も来ます！」と、お友達家族を誘って来場する姿が見られた。また、「認知症の夫を連れては、なかなか音楽を聴きに行けない。でも、ここでなら聴けると思い、来てみました」と話してくださった高齢のご夫婦もいた。さらに、小学生が友達と約束し、子ども同士で音楽鑑賞に訪れる姿も。普段から遊びに来ている児童センターでコンサートが開催されるからこそ、気軽に足を運べるのだろう。今年は、乳幼児親子（家族）に加えて、小学生や地域の高齢者の来場も増え、昨年の約140名から大幅に増加し、210名が来場。

昨今は、いつでもどこでも好きな動画を観たり音楽を聴いたりできるが、ライブの力はやはり大きい。本物の音を間近で聴くことでしか得られない感動がある。しかし、小さな子どもを連れてコンサートに出向くのは難しい時期もある。だからこそ、子どもたちにはライブを楽しんでもらいたい。そんな思いを込めて、音葉ウインド・オーケストラの皆さんと一緒に選曲や演出を企画した。今回のコンサートは、観客参加型！一緒に歌ったり踊ったり、クイズを楽しんだり、会場にはたくさんの笑顔があふれた。

終演後、小学生から「うるさかった～！耳が壊れるかと思った～」との声。しかし、「え～っ！楽しくなかった？」と聞くと、大きな声で「楽しかった～！」と返ってきた。また、後日コンサートに来た3歳の子が「♪やりきるしかないさ～」と歌って聞かせてくれた。それは、コンサートの最後に演奏した「勇気100%」の歌詞だった。母親からも「コンサート以来、毎日幼稚園に行く前に歌って踊ってから登園するようになったんです」との話が。以前、その子が幼稚園に行きたがらないと聞いていただけに、胸が熱くなった。

「そう、100%勇気！もうやりきるしかないさ～」

（南部児童センターインストラクター 吉田 知加子）

□気の合う仲間たちと…（学童保育所）

福笑い、ビニール凧作り・遊び、お手玉、かるた作り・遊びといったお正月遊びを実施した。その他、子どもたち発案のビンゴゲームとお楽しみ会を融合した友だちクイズ&ビンゴゲーム、豆まき用

箱作り等を実施した。保護者数名より家庭ではできないことなのでありがたいといった声が聞かれた。(山王学童保育所)

(学童保育所主任 平野 美幸)